

重症 GVHD の下痢症状 2 事例の振り返り

The swing of two diarrhea symptom examples of the severe GVHD returns

東 7 階病棟 一之瀬 ゆり 小泉 彩 牛越 さゆり

堀金 節子 太田 まさえ 塩原 まゆみ

<要旨>

当病棟では平成 14 年より造血幹細胞移植を行っている。今回、GVHD の症状の一つである下痢に焦点を当て、1 日 4000g 以上の下痢が出現した症例と、便失禁管理システムを使用した事例の振り返りを行った。フレキシシールの使用により患者の仙骨部褥瘡の早期治癒や看護量の減少につながり、下痢の看護に有効であった。

キーワード：GVHD、下痢、フレキシシール

I. はじめに

当病棟では平成 14 年より造血幹細胞移植を行っている。移植が始まった当初は年間 10 例だったが、今年度は 31 例の移植を行なっている。このように年々症例が増加し、重症移植片対宿主病（以下 GVHD とする）をきたす患者も増えている。GVHD の症状は下痢、皮疹、肝機能障害が認められる。今回、1 日 4000g 以上の下痢が出現した症例を経験し、対応に困難をきたした。下痢が出現する度のシーツ・おむつ交換、更衣、陰部洗浄、皮膚損傷への対応等、多くの看護量を要した。その後同様の症例があり、褥瘡もあったため当病棟で、初めて便失禁管理システム（以下フレキシシールとする）を使用した。2 事例目はフレキシシールを使用することで患者の仙骨部褥瘡の早期治癒や看護量の減少につながり、患者・看護師共に効果があったため報告する。

II. 研究方法

フレキシシールを使用しなかった 1 事例、使用した 1 事例の 2 事例に対し、急性 GVHD（移植後 0～100 日）症状のうち、下痢症状に焦点をあて、事例検討を行う。

倫理的配慮：事例を挙げる患者に対して実名、頭文字の明記を避け、個人を特定できないようにした。

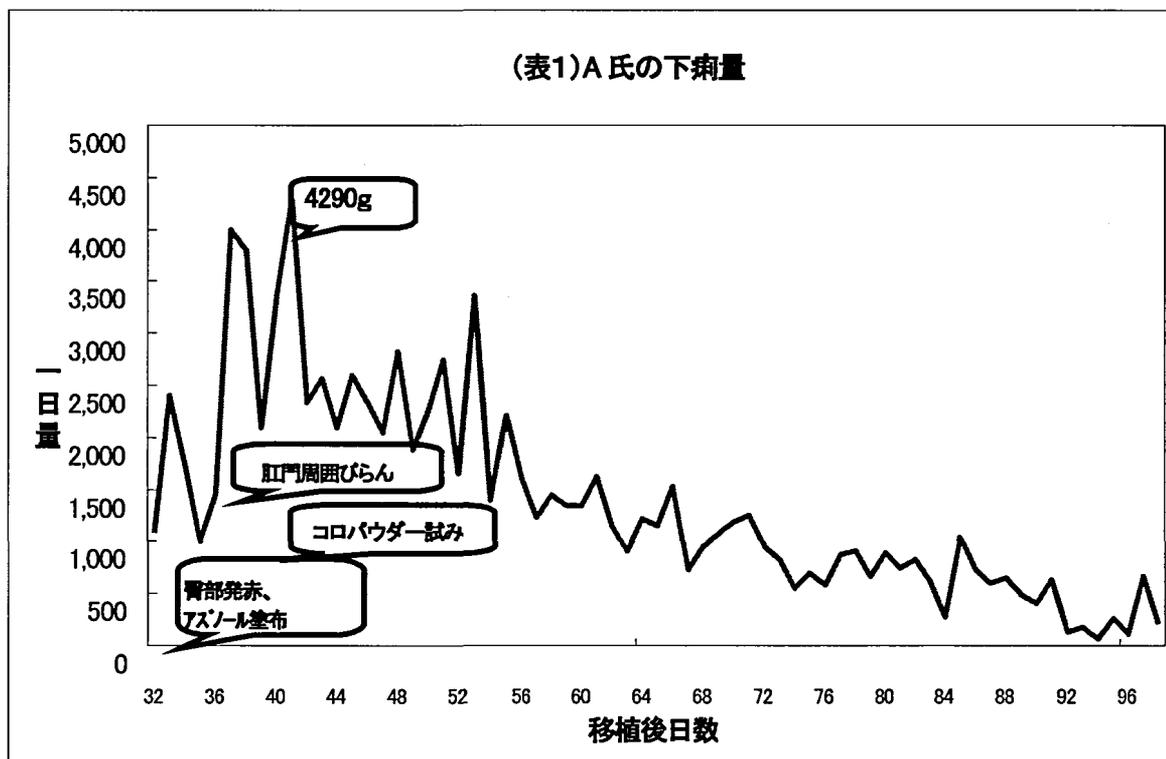
Ⅲ. 用語の定義

GVHD : Graft-versus-host Disease の略で、日本語では「移植片対宿主病」という。同種移植を受けた場合にしばしばみられる合併症で、移植片に含まれるドナーリンパ球が、患者の体そのものを「よそ者」とみなして攻撃する複雑な免疫反応のこと。その代表的なものとして下痢・皮疹・肝機能障害がある。

Ⅳ. 事例紹介

事例1 : A氏 65歳 男性 急性骨髄性白血病 臍帯血移植

移植後20日目より不消化便が出現。30日目よりGVHD特有の緑色水様便となり、回数・量ともに増加、32日目より失禁となり便かたを開始した。41日目には最大4290gの便量を認め、下痢が床下にまであふれてしまう日々が続いた。その後90日目頃より500g以下となり、98日目に下痢症状は消失した。最初の頃は排便時コールがあり室内トイレへの歩行介助を行っていたが、32日目頃より頻回な下痢のため体力・気力ともに減退し、一人でのトイレ歩行が困難となり看護師2名で介助にて床上排泄を行い、さらに紙おむつでの対応となった。下痢症状の出現により肛門周囲のびらん、出血があったが、スキンケアチームへ相談しコロパウダーの使用で皮膚症状は改善した。(表1)



事例2 : B 氏 49 歳 男性 骨髓異形成症候群 同種末梢血幹細胞移植

移植後7日目に脳出血を合併し、ICUへ入室。22日目に帰室したが、仙骨部の褥瘡、下痢症状はすでに出現していた。全身状態も悪く、グラスゴーコーマスケール E4-VT-M5 の状態であった。A 氏の経験から下痢への対策を検討し、26日目よりフレキシシールを挿入。定期的なガス抜き、毎日の陰部洗浄、おむつ交換を行い褥瘡は44日目に治癒した。下痢は26日目に330gが最大で、その後はバグにマキがしたが少量であり53日目に抜去した。

V. 考察

重症GVHDには確立された治療方法がなく、下痢に伴う腹痛や頻回な下痢による排便のための疲労感等、患者の苦痛緩和を図ることが主な看護となる。A 氏の場合も3ヶ月以上下痢症状が持続し、肉体的・精神的負担の増大につながった。そのためADLが低下し歩行が困難となり、頻回な下痢対応は紙オムツを使用し看護師が全介助で行なっていた。1日の排便回数だけでなく1回の排便量も多く、オムツだけでは取りきれず排便する毎にシーツ交換、おむつ交換、更衣、陰部洗浄を行っていたため、A 氏の疲労感はさらに大きくなりADLが低下した。ADLが低下することで、看護量も増加した。それに比較し、B 氏は下痢症状への対応としてフレキシシールを使用した。フレキシシールの適応条件は1. 水様便もしくは水様に近い泥状便で臥床状態の患者であること、2. 直腸障害がない患者であること、が挙げられている。A 氏も適応基準を満たしていたがその時点では院内に導入されていなかったため使用できなかった。B 氏はフレキシシールを使用したことで排便毎のシーツ交換、更衣の必要がなくなり、オムツ交換の回数も減少した。そのため下痢時の看護量の減少ができた。フレキシシールを使用した事例研究を検索したが導入初期のため研究されてなく、有効性を立証することは困難だが、A・B 氏の経験から、臥床状態で下痢症状が出現している患者、意識障害のない患者に対して有効であった。

頻回な下痢は肛門周囲の皮膚障害を合併する危険性が高く、移植後で免疫抑制剤やステロイド剤を使用している患者にとっては感染のリスクも高くなる。A 氏も頻回な下痢により肛門周囲のびらん、出血を起こしてしまい患者の苦痛は増大した。A 氏の皮膚障害は、陰部洗浄・コロパウダーの使用で治癒までに約2ヶ月を要した。B 氏はICUから帰室時ステージIIの褥瘡が出現していたが、頻回な下痢によって臀部が汚染され、褥瘡がステージIIIまで悪化した。そのためフレキシシールを使用し、定期的な褥瘡評価、A 氏と同様の処置で、約1ヶ月で褥瘡が治癒した。フレキシシールの使用によって、臀部の便による汚染が減少し、仙骨部の褥瘡も比較的清潔に保つことができ、褥瘡の早期治癒が可能となった。

VI. 結論

本研究から、フレキシシールを使用することは患者の身体的負担が軽減し、皮膚損傷、褥瘡の早期治癒につながり、GVHDの下痢の看護として有効であった。今回フレキシシールを使用した患者は意識のない患者であり、受け入れ状況、使用したことに対する思いを聞くことができなかった。意識のある患者にフレキシシールの使用を促したところ拒否されたこともあり、意識のある患者への使用が今後の課題となってくる。

今後、フレキシシールの有効性を説明した上で意識のある患者にも使用できる方法を検討していきたい。

VI. 参考文献

- ・ 澄川美智他：GVHDの看護，今日の移植，11（5），1998.
- ・ 中村一仁他：仙骨部褥瘡の治療に対するFlexiSealの使用経験，リハビリテーション医学，44（1），2007.